2　暑熱対策

寒冷期における保温対策と異なり，夏の冷房すなわち防暑対策は一般に御座なりにされがちである。豚の適温は15-20℃（分娩直後の子豚は28-30℃）であるが，体温調節機能が劣っているために，防暑対策を第一に考慮しなければならない。

（1）肥育豚の管理

豚は30℃を越えると，食欲が減退し増体重は急激に落ちる。32℃以上になると逆に体重は減少する。体重が大きくなるほど暑さの影響を強く受ける。一般的な防暑対策は勿論のことであるが，特に飼育密度に留意して，通風，乾燥に努める。

（2）繁殖豚の管理

30℃を越えると，繁殖豚は受胎率が低くなり発情を示さないものまで出てくる。豚舎内の通風，乾燥に努め，できれば屋根下には断熱材を用いる。換気扇や送風機を用い，豚舎内を涼しくすることが望ましい。特に分娩柵を利用する期間は，豚自身涼しい場所を求めて移動することができないので，熱射病などになることが多い。このことは子豚の育成率に大きく影響するので分娩豚舎の環境整備に十分留意しなければならない。

（3）種雄豚の管理

雄豚は皮膚が厚く，しかも皮下脂肪に覆われているために暑さに弱い。特に夏から秋にかけて性欲の減退と造精機能の低下が目立つ。日中の暑い時の供用は避けた方がよい。

（4）豚舎および施設の管理

一般的な防暑対策は次のとおりである。効果があがるように適宜組み合わせて実施する。

ア　豚舎は，窓や腰板，戸を外して開放的にする。
イ　照り返しや直射日光を防ぐため，西，南側に日陰樹を植えたり，人工日陰を作る。
ウ　屋根は断熱効果のある材料を用いる。できればスプリンクラー等で屋根に散水する。
エ　ボロ出し作業は毎日実施して床面を常に清潔にする。（乾燥促進効果）

3　寒害対策

成豚は暑さに弱く，子豚･幼豚は寒冷に弱い。一方，病気の発生は，夏は消化器系統の病気にかかりやすい。冬は，呼吸器系統の病気にかかりやすい。豚の適温は，年齢によって違うが，豚舎内の温度は厳寒期でも10℃以下にならないよう心がけたい。新生児の子豚は5℃を下回ると活動が鈍りほとんどが斃死する。分娩時には介助し，保温（32℃-25℃）が必要である。加温の熱源を効果的，経済的に活用するためには豚舎全体を防寒（開放的豚舎ではビニール，エスロンなどを用い，すきま風を入れない）的構造等処置を施すことが大切である。また暖かい日には空気の入れ換えを図ると同時に，日光を豚舎内の奥深くまで照射させ，床面の乾燥を図るように努める。